

エズラ・パウンドの ‘PAIDEUMA’ について

安 川 昱

Ezra Pound が1938年に発表した、精神史であり「信仰告白」であるとともに、いわば、「伝道の書」ともいうべき特異な文化論は *Guide to Kulchur* という奇妙な表題をもっている。^① パウンドが、Culture でも、ドイツ語の Kultur でもなく自家製の ‘Kulchur’ なる語を用いたのはどのような意図によるものであろうか。またそれはどのような概念を表わすものであろうか。

この解明には、同書にあらわれる ‘Paideuma’ という用語に関するパウンドの説明が役立つ。ギリシア語の παιδεία は動詞 παιδεύω (養育する、教育する) に基づく名詞で、教育の対象や結果を表わし、その意味は 1) 養育、教育される者、幼児、学生、生徒 2) 教育されるもの、教科目 3) 転じて、教育、教育の手段、教育の結果としての教養、学問であるが、^② パウンドはこの語を、主として、彼の崇敬するドイツの探検家で民俗学者の Leo Frobenius (1873—1938) の用いた意味で採用する。パウンドは、フロベニウスの ‘paideuma’ について「ある時代に深く根ざした思想のからみ合い、あるいは複合を表わすため、固定化した連想になった語や句を避けフロベニウスは Paideuma という語を用いる」^③ と説明している。Kultur や Zeitgeist などの語は一定の固定観念や雰囲気に伴うので、時代の動的な思想を表現することができない。パウンドも、フロベニウスに倣って、慣習的な思想 (‘idées reçues’) や雰囲気 (‘atmosphere’) を伴った語を避けるため ‘paideuma’ を用いたい、という。それは「ある時代に深く根ざした思想のからみ合い、複合体」を、「動的な思想」を、「活動する軟骨質の思想の根」を、そして、「次の世代にとって新しい理解の手段となるような新しい文明」を意味する。

When I said I wanted a new civilization, I think I cd. have used Frobenius' term.I shall use Paideuma for the gristly roots of ideas that are in action.... The “New Learning”can imply whatever men of my generation can offer our successors as means to the new comprehension.^④

いわば、Paideuma はパウンドの『大学』(*Ta Hio: Great Learning*)^⑤ である。上に引用

した文中の“New Learning”はそのような意味に解釈できるであろう。伝統を抱括して時代に生きる文化、そして次代に受肉されるような文化を表わすためパウンドがフロベニウスの‘Paideuma’を借用するのだとすれば、‘Kulchur’はそれに代るパウンド自身の用語と考えてよいであろう。‘Kulchur’は‘Paideuma’のパウンド流の訳語である。

“The history of a culture is the history of ideas going into action.”^⑧

というパウンドにとって、「文化」とは、歴史的展望のもとに、時代の要請とエネルギーが結集されることである。ヘロドトスの「歴史」は挿話の集大成であっても‘Paideuma’の歴史ではない。しかし、中国の歴史は‘Paideuma’の歴史である。なぜなら中国の善き統治者はすべて『詩経』に学び、それを‘Make It New’（「日日新」）した者であるから。^⑨ 知識は文化ではない、とパウンドはいう。

Guide to Kulchur におけるパウンドの提言の中心は、孔子の思想を学び、儒教的秩序によって崩れんとする西欧文明を建て直すことである。『大学』を新たに翻訳したパウンドはその目的をアメリカを文明化するためだと René Taupin 宛の書簡で語っているが、^⑩ 抽象的な議論ではなく、実践を重んじる孔子の思想は、‘ideas into action’を詩論において絶えず主張してきたパウンドにとってぴったりの思想であった。

パウンドは、先ず、孔子の哲学が‘modus vivendi’の要素の濃いことを指摘し、かつ社会的責任に基づく思想であるという。

Take the whole ambience of the Analects (of Kung fu Tseu), you have the main character filled with a sense of responsibility. He and his interlocutors live in a responsible world, they think for the whole social order.^⑪

その上、孔子の思想が偉大な感受性に裏打ちされていることを忘れてはならない。

Our general notion of Confucius (Kung) has perhaps failed to include a great sensibility. The conversations are the record of a great sensibility.^⑫

それに対して、キリスト教の思想は全く“balanced system”を示したことはなく、ギリシアの哲学思想にいたっては、パウンドによれば、社会的には無責任で、全体の人のためという考えはなかった。それは少数の知的グループの高尚な議論であった。^⑬ そして思想を社会に生かさなないものは人類の敵であるという。

The enemies of mankind are those who petrify thought, that is KILL it, as the Marxists have tried to in our time, and as countless other fools and fanatics have tried to in all times....^⑭

アリストテレスは人間と自然のさまざまな事象を分析し、かつ分類したが、事実の表皮をはぐ底の抽象的議論の域に留まっていて、その「倫理学」においてアリストテレスは人間の意志作用を充分理解していない。倫理学に関していえば、アリストテレスは孔子の「靴をみがく資格もない」。^⑩ 孔子の思想は意志の根か枝を張りだすような形で広がり、その重みはすべての章句にあらわれている。

As working hypothesis say that Kung is superior to Aristotle by totalitarian instinct. His thought is never something scaled off the surface of facts. It is root volition branching out, the ethical weight is present in every phrase.^⑪

要するに、孔子の前ではアリストテレスの所説は全くの *dilettantism* である。^⑫ 孔子はダイナミズムを持っている。力の集中の渦巻の中心である。文化の渦巻と渦巻が一致するところに輝かしい時代が誕生する。孔子は渦巻派 (*vorticist*) だ、^⑬ とパウンドはいう。また、自分はキリスト教的教育を受けなかったことを後悔しないというパウンドは、英国の偽善の根は教会の牧師の説教にあるとし、彼等は文化の何たるかを知らず、信じてもない事を行ってきたのだという。

...most protestant and nearly all anglican parsons are uncivilized, many are pigs, some have made a tolerable compromise, i. e. are doing certain things they don't quite believe, as a compromise. ... No intellectual curiosity in any anglican publication.^⑭

パウンドにとって魂に訴え、'paideuma' たりうる宗教は、ギリシアの神々であり、^⑮ Ovid の *Metamorphoses* の世界である。^⑯ そして新らしい 'Paideuma' の第一歩は、現代の金融資本主義機構の浄化をはばむ聖職者を一掃することだという^⑰。

パウンドにとって、宗教とは最高の知性を信じることであり、芸術も同様に人間の精神を知的活動に導くものである。

The worship of the supreme intelligence of the universe is neither an inhuman nor bigoted action. Art is, religiously, an emphasis, a segregation of some component of that intelligence for the sake of making it more perceptible. The work of art (religiously) is a door or a lift permitting a man to enter, or hoisting him mentally into, a zone of activity, and out of fugg and inertia.^⑱

パウンドは、1922年にすでに、[孔子と Ovid の *Metamorphoses* が唯一の安全な宗教への案内書であると述べているが、^⑲ *Guide to Kulchur* にも、孔子が韻文を重視した点に触れて、

次のように述べている。

Great intelligence attains again and again to great verity. The Duce and Kung fu Tseu equally perceive that their people need poetry; that prose is NOT education but the outer courts of the same. Beyond its doors are the mysteries. Eleusis. Things not to be spoken save in secret.®

(ここに The Duce 即ち ムッソリーニが孔子と並んで、パウンドの崇拜の対象になっているが、パウンドのファシズム信奉については後で触れる。)

パウンドが *Guide to Kulchur* において、具体的な 'Paideuma' として、読者に推薦するのは

『詩経』『大学』『中庸』『論語』

ホメロスの叙事詩

Ovid の *Metamorphoses*

Dante の *Divina Commedia*

シェークスピアの戯曲

である。® そして、人は力を得るために読書するべきである。書物は、手に握っている光の玉でなければならない。("Properly, we shd. read for power. Men reading shd. be man intensely alive. The book shd. be ball of light in one's hand.")® と述べている。活きた思想とは、われわれの行動の規範となるものを与えなければならない。

.... ideas which are intended to "go into action", or to guide action and serve us a rule (and/or measures) of conduct.®

さて、パウンドの孔子に学ぶ Paideuma とは具体的にどのようなものであろうか。Rosenthal は *The Chinese Cantos* (53–61) と *The Pisan Cantos* (74–84) に関連して、

.... the practical idealism of Confucianism, becomes an analogue for Pound's own ideas of order and of secular aestheticism. "Order" and "brotherly deference" are key words in Confucius' teachings; both princes and ordinary men must have order *within* them, each in his own way, if dominion and family alike are to thrive. The Chinese cantos view Chinese history in the light of these principles of ordered intelligence in action, with the ideogram ching ming (name things accurately) at the heart of the identity between Confucian and Poundian attitudes.®

と述べているが、パウンドは、*Guide to Kulchur* を『論語』のいくつかの章句の引用とその英訳をもって始める。最初に衛霊公篇から「一以貫之」と漢字で引用し、次いで

Said the Philosopher : You think that I have learned a great deal, and kept the whole of it in my memory? Sse replied with respect : Of course. Is't that so? It is not so. *I have reduced it all to one principle.*^⑧ (アンダーライン筆者)

と全体を英訳して示す。

子曰、賜也、女以予為多学而識之者与、然、非与、曰、非也、予一以貫之。の翻訳である。意図的なものかどうか分からないが、パウンドの解釈にはずれがあると思われる。確かに、パウンドの 'paideuma' の理念——文化の受肉と総合からいえば、この訳のように解釈すると都合がよいのであるが。辞句の正確な解釈はしばらく措くとして、パウンドは「正名」「知人」「学」などの漢字を引用しつつ、『論語』によって彼の文化論の基調を明らかにするのである。Rosenthal も述べているように「正名」はパウンドにとっても最も大切な出発点であろう。子路篇の

……子曰、必也正名乎……名不正、則言不順、言不順、則事不成……

をパウンドは

Kung : To call people and things by their names, that is by the correct denominations, to see that the terminology was exact.If the terminology be not exact, if it fit not the thing, the governmental instructions will not be explicit, if the instructions aren't clear and the names don't fit, you can not conduct business properly.^⑨

と英訳し、また “The ch'ing is used continually against ambiguity.”^⑩ と説明する。これは、言葉の適確な使用、明確な映像の表現、輪廓の鮮明を標榜した Imagism の主唱者パウンドの最も共感するところであった。正名は、'Paideuma' の第一歩なのである。^⑪

CH'ING MING, a new Paideuma will start with that injunction as has every conscious renovation of learning.^⑫

(Confucius) demanded or commended a type of perception, a kind of transmission of knowledge obtainable only from such concrete manifestation. Not without reason.^⑬

パウンドがついで孔子の思想で重視するのは秩序の観念である。人間の精神が、国家が、宇宙がすべて有機的に結びついている秩序、^⑭ そこに真と善がある。芸術の目的はこの秩序を教え、

道徳的刷新に導くことである。そして、音楽はこの秩序を暗示しているという。

The function of music is to present an example of order, or a less muddled congeries and proportion than we have yet about us in daily life. Hence the emphasis in Pythagorus and Confucius.^④... The magic of music is in its effect on volition. A sudden clearing of the mind of rubbish and the re-establishment of a sense of proportion.^⑤

しかし「明徳を明らかにし、民を新たにし、そして至善に止まることにある」とする大学の道、「天子より庶人に至るまで、同じくみな身を修めることを以って根本」とする儒教的秩序は一種の‘hierarchy of significance’であり、社会的にはファシズム、全体主義に通じる危険性を孕んでいる。

Donald Davie は ‘*Guide to Kulchur is an overtly Fascist book*’^⑥ と呼んだが、確かに ‘A civil society is one where Strength comes with enjoyment.’^⑦ と述べ、また

.... (Wyndham) Lewis discovered Hitler. I hand it to him as a superior perception. Superior in relation to my one “discovery” of Mussolini.^⑧

というパウンドが「反動的」であることは否定できない。しかし、それはパウンドが英米の民主主義に失望し（‘Democracies have for a century failed lamentably to educate the people and keep the people aware of the absolutely rudimentary necessities of democracy. The first being monetary literacy.’^⑨）その金融資本機構の弊害を強く意識していた結果であった（*Guide to Kulchur* や *The Cantos* でしばしば ‘usury’ なる語で非難する）。パウンドの Mussolini 崇拜も、初期のファシストが実施した一種の社会保障制度や、為政者の強力な指導による国民教育から ‘new paideuma’ が、有機的な hierarchy が生れるかに見えたからである。^⑩ パウンドが Thomas Jefferson や John Adams を高く評価するのも全く同じ発想である。（もっとも、実際には、詩人の心の中ではもっと複雑に、心情的にからみあっていて、John Harrison がいうように、芸術におけるロマン主義、政治や哲学におけるヒューマニズムの対極としての新古典主義を指向するところにパウンドのファシズムとの共感が働いたことはいえるかもしれない。G. S Fraser は、*The Cantos* の登場人物が、主として、Odysseus, Sigismundo de Malatesta, Thomas Jefferson, John Adams のような *vita activa* と、孔子のような *vita contemplativa* であることを指摘しているが、^⑪ そこに暗示されるものは男性的行動、残酷さ、暴力、そして権威である。Canto III の “Ignez da Castro murdered, and a wall / Here stripped, here made to stand” Canto IV

の“‘It is Cabestan’s heart in the dish.’” Canto V の Cesare Borgia そして Malatesta Contos 等はすべて残酷さと強烈な意志力への嗜好を示している。イタリア・ルネッサンスのアンティ・ヒューマニズムは強い共感を持ってうたわれていることは興味のある事実だ。結局、パウンドにとっては、達成された文明のレベルが問題なのである。）パウンドの社会的関心は、また、祖国アメリカに対す愛国心にあらわれ、‘American Renaissance’ という問題が絶えず彼の頭を占めていた。パウンドは、初期の1913年にすでに *Patria Mia*[®] というエッセイを書き、アメリカの文化的停滞を批判しながらも、アメリカに文芸復興は可能である。現在は不安定であるが、ルネッサンスのイタリアもそうだった。アメリカは異った人種と、異った文化の坩堝となって、そこから新しい文化の生れる可能性が、希望があるという。そして、例えば、生活の不安なく、自由な創造活動に従事できるよう国家は年金を与えよ、というようないくつかの具体的な方策を提言している。

『大学』を英訳したのはアメリカの教化の試みである、とパウンド書簡に書いていることはすでに述べた。パウンドは、第二次大戦中、ローマから米国の政策を批判する放送を行なって、戦後ピサに於いて反逆罪容疑で逮捕された。愛国心からでた建設的批判であったが、皮肉な運命であった。（1945年裁判のためワシントンに連行されたが、精神異常と診断され、セント・エリザベス病院で13年にわたる拘禁生活を送ることになるが、多くの知識人の運動が効を奏し、1958年、起訴状が却下され、パウンドは無事釈放された。⑧）

最後に、*Guide to Kulchur* や後期の *The Cantos* にリフレインのように度々あらわれる、パウンドの‘Paideuma’に関連する重要な2、3の用語について述べておきたい。

先ず‘Make It New’について。これは1934年に出版したエッセイ集の標題にも用いているもので、パウンドの最もお気に入りの標語で、文化の総合による更新という彼の理念をよく表わしている。これは『大学』の

湯之盤銘曰、苟日新、日日新、又日新。

を英訳したもので、パウンドの訳は通の通りである。

In letters of gold on T’ang’s bath-tub :

AS THE SUN MAKES IT NEW

DAY BY DAY MAKE IT NEW

YET AGAIN MAKE IT NEW. ⑨

次に、「知人」と並べて引用されるギリシア語に ‘πολλῶν θ’ἀνθρώπων ἴδεν ἄστεα καὶ νόον ἔγνω.’（彼は多くの人々の都市を見而して彼らの心を知れり。）がある。これはホメロス

の「オデュッセイア」の第1巻の第3行目の詩句で、Canto I にオデュッセウスの漂泊をうたい、また自身亡命の生活を送るパウンドにとって、これは‘Periplum’^⑥（周航）という語とともに味わいの深い言葉である。広く東西の各港を周航し、異った文化に接するのみならず、過去への旅によって現在の真実を問いただそうとする。Canto I のオデュッセウス断片が冥土への旅を扱っているのは甚だ象徴的である。オデュッセウスの出会う亡霊達は過去の事件を語りつつ、オデュッセウスを通してそれを現在の事象と連結するのである。

以上に述べた‘MAKE IT NEW’と‘πολλῶν δ’ἀνθρώπων ἴδεν’はパウンドの詩と翻訳に、特に *The Cantos* に、類例のない独特な技法によって実践されている。

例えば、Canto I は最後の数行を除いてホメロスの「オデュッセイア」第11巻の一部の自由な英訳であるが、それはギリシア語の原典ではなくルネッサンスのラテン語訳から訳したものである。^⑦ これは各時代の「新しい‘Paideuma’」を更に「新らしく総合する」という意図に基づくものである。1538年の Andreas Divus のラテン語訳（ルネッサンス・イタリアの‘new paideuma’）を通じてホメロスのギリシア語が20世紀のパウンドの英語に肉化された（現代の‘new paideuma’）。*Homage to Sextus Propertius* (1919) の翻訳にみられるような独特な自由訳の方法は根本的には、このような考えに基づくものと思われる。^⑧

The Cantos の技法——無数の文学的・歴史的引用や引喩、迂遠な言及あるいは暗示、外国語の詩行をそのまま、あるいは少し変えて引用するというような作詩法は全くユニークなものである。パウンドは外国語の引用の多いことについて

...no single language is CAPABLE of expanding all forms and degrees of human comprehension.^⑨

と述べ、また *The Cantos* が読者に過度な努力を要求するという非難に答えるかのように Canto XCVI の冒頭に

If we never write anything save what is already understood, the field of understanding will never be extended. One demands the right, now and again, to write for a few people with special interests and whose curiosity reaches into greater detail.

と書きとめている。

The Cantos に関する Louise Bogan の批評

The poet was breaking down prejudices against forgotten or neglected cultures. He was striking across the lines of specialist scholars, so strict and so snobbish

in our own day. He was presenting the past as though it were all simultaneous and were still going on; he was making the point that in art this synchronization and timelessness actually exist.^⑥

は適切である。われわれは *The Cantos* にパウンドの 'paideuma' の実現をみることができよう。もっとも中国史や中国思想や米国史, あるいは経済学を扱った説教や教育としての paideuma は読者を悩ますパウンドの obsession ではあっても, 叙事詩としての詩的綜合に成功しているとはいえない。作詩上の技法としてみても, 余りにもひとりよがりになってしまっているものがある反面, 成功した諸篇は, 確かに比類のないすばらしい効果をあげ, 読者に宇宙的な啓示を与える。'paideuma' は常識的にいってしまえば, 知識を消化し, 血肉とすることにならなくなってしまうのだが, そして *Guide to Kulchur* で説くところのものは, そのようなことに結局はなるのだと思われるのであるが, われわれはむしろパウンドの詩の世界におけるその実現にこそ深い感銘を受けるのである。

註

- ① Ezra Pound: *Guide to Kulchur*, Faber & Faber, 1938. 但し, 同年 New Directions から出版された米国版の表題は *Culture* となっている。尚, 1952年米国版の再版では *Guide to Kulchur* となる。同版のジャケットの註記によると同書の original title は "*Kulch*", or *Ez' Guide to Kulchur* だったという。
- ② Ref., Liddell & Scott: *Greek-English Lexicon*, new edition, Oxford, 1958
- ③ *Guide to Kulchur*, p. 57 'To escape a word or a set of words loaded up with dead association Frobenius uses the term Paideuma for the tangle or complex of the inrooted ideas of any period.'
- ④ Id., p. 58
- ⑤ パウンドは1928年『大学』の英訳 *TA HIO: The Great Learning*, 1937年には『論語』の英訳 *Confucius: Digest of the Analects* を出している。
- ⑥ *G. to K.*, p. 44
- ⑦ Id., p. 31
- ⑧ D. D. Paige (ed): *The Letters of Ezra Pound 1907-1941*. A Harvest Book, 1950, p. 217
- ⑨ *G. to K.*, p. 29
- ⑩ Id., p. 232
- ⑪ Id., p. 29
- ⑫ Id., p. 277
- ⑬ Id., p. 326
- ⑭ Id., p. 279
- ⑮ Id., p. 312
- ⑯ Id., p. 266
- ⑰ Id., p. 301
- ⑱ Id., p. 301

- ⑲ Id., p. 300
- ⑳ Id., p. 184
- ㉑ Id., pp. 189-190
- ㉒ *The Letters*, p. 183
- ㉓ *G. to K.*, pp. 144-5
- ㉔ Id., p. 236
- ㉕ Id., p. 55
- ㉖ Id., p. 34
- ㉗ M. L. Rosenthal : *A Primer of Ezra Pound*, New York : Macmillan, 1960, p. 49
- ㉘ *G. to K.*, p. 15
- ㉙ Id., p. 16
- ㉚ Id., p. 21
- ㉛ Id., p. 58
- ㉜ Id., p. 28
- ㉝ Id., p. 23
- ㉞ Id., p. 255
- ㉟ Id., p. 283
- ㊱ Donald Davie : *Ezra Pound : poet as Sculptor*, New York : Oxford University Press, 1964, p. 146
- ㊲ *G. to K.*, p. 157
- ㊳ Id., p. 134
- ㊴ Id., p. 158
- ㊵ John Harrison : *The Reactionaries, A Study of the Anti-Democratic Intelligentsia*, New York : Schocken Books, 1967, p. 122 ff.
- ㊶ G. S. Fraser : *Ezra Pound*, Oliver and Boyd, 2nd ed., 1962, p. 6
- ㊷ Ezra Pound : *Patria Mia* and *The Treatise on Harmony*, Peter Owen, 1962 (英国初版) 但し *Patria Mia* は 1913 年に書かれ 出版社で原稿が行方不明になっていたのを 1950 年に発見され, Ralph Fletcher Seymour から米国初版が出ている。
- ㊸ Cf., Julian Cornell : *The Trial of Ezra Pound*, New York : The John Day, 1966
- ㊹ Ezra Pound : *Confucius : The Great Digest & Unwobbling Pivot*, Peter Owen, 1951, p. 36
- ㊺ 'periplum' (περιπλους) : circumnavigation. Periplus also designates an account of a coasting voyage, such as that of Hanno. Note, however that Pound always writes "periplum". *Annotated Index to the Cantos of Ezra Pound*, Univ. of California Press, 1959
- ㊻ T. S. Eliot (ed.) *Literary Essays of Ezra Pound*, Faber and Faber "Translators of Greek : Early Translators of Homer."
- ㊼ J. P. Sullivan はその著 *Ezra Pound and Sextus Propertius, A Study in Creative Translation*, Univ. of Texas, 1964. で 'creative translation' といういい方をしている。また, L. S. Dembo は *The Confucian Odes of Ezra Pound : A Critical Appraisal*, Univ. of California Press, 1963 で 'Apocalyptic Translation' という語を使っている。
- ㊽ Michael Reck : *Ezra Pound* p.118
- ㊾ Louise Bogan : *Selected Criticism*, London 1957, p. 179 (as cited in G. S. Fraser : *Ezra Pound*, p. 109)